

Shakespeare 史劇の悲劇性

関 谷 武 史

Shakespeare 史劇のうち、Richard II、Henry IV 一部及び二部、Henry Vを一連の作品と看做し、その流れの中に横わっている悲劇性を、中世の秩序観に照して、考察しようとするのが、この小論の意図するところである。ここに、秩序観というものを持ち出したのは、何時、内乱の恐怖に陥るかも知らない不安なエリザベス朝の人々に、この秩序観を背景に、作品を表わす事によって、当時の演劇に課せられていた社会的使命を、Shakespeare が、達成しようとしたと思うからである。そして、また、ここに、四つの作品を連作として取り上げたのは、Shakespeare の史劇は、事件も思想もばらばらのものではなく、一種の連作を成しているという、Tillyard や Theodore Spencer らの考え方に加えて、この中世の秩序観に沿って、以上四つの作品を考察しようとする時、それが一連の流れを成していると考ええるからである。

さて、中世の秩序観について考える時、それは、宇宙に存する全てのものが、揮然とした秩序体系を成しているという観念であったと要約し得る。然し乍ら、この考えの裏に、この秩序は、非常に崩れやすいものでもあるという考えが存在していた。しかも、更に重要な事は、ひとたび、この体系が乱れると、連鎖的に混乱と不調和が続くという考え方が流行していた。であるから、このような秩序体系を人間の側から乱すという事は、当時にとっては、恐ろしい罪業とされたのである。

ところで、ここに、Shakespeare が、果して、こうした中世思想の信奉者であったのか、或いは新しい humanism 思想の信奉者であったのかという事が、問題となってくる。それは、Shakespeare が活躍した英国のルネッサンスと云われる時代を、中世の完全な否定の時代として考えるのか、中世の伝統の中にあった時代として考えるかによって、決定され得るであろう。最近の Shakespeare 史劇の研究家、特に、Tillyard や Theodore Spencer といった人達は、後者の考えに立って、Shakespeare 史劇を考察している。であるから、彼らにとっては、Hamlet の What a piece of work is a man! how noble in reason!
how infinite in faculty! in form and moving how express and admirable!

in action how like an angel! in apprehension how like a God! the beauty of the world! the paragon of animals! [II. 2. 316~21] という、従来、人間解放の讃歌として、考えられて来た言葉も、実は、中世の人々が求めた神と同じ姿につくられた人間の墮落以前の理想の姿と考えられたのである。私にとって、それがどちらであるかという事は、身に余る問題でもあり、この小論の直接の目的でもない。ただ、ここに断言出来得る事は、Troilus and Cressida の中での Ulysses の位階の論をみても分るように、この秩序観に関する限りに於ては、Shakespeare が、それを、尊重し重要視し、かつ、正しく、消化していたということである。

ここで、もう少し詳しく、秩序観について、触れる必要があろう。中世にあっては、その

秩序観は Chain of being [存在の鎖], A Series of corresponding planes [対応する一連の平面], A dance to music [音楽に調和する舞踏] という三つの概念によって示されていた。十五世紀の法学者 Sir John Fortescue は、Chain of being について、次のように述べている。

In this order angel is set over angel, rank upon rank in the Kingdom of Heaven; man is set over man, beast over beast, bird over bird, and fish over fish, on the earth, in the air, and in the sea; so that there is no worm that crawls upon the ground, no bird that flies on high, no fish that swims in the depth, which the chain of this order binds not in most harmonious concord. [Sir John Fortescue's works edited by Lord Clermont (London, 869) I.P. 322.]

Chain of being の考えによれば、宇宙の万物が、上は天使に始って、下は最も卑小なものに至るまで、鎖によって、きちんと、結ばれていたのである。こうした、言わば、縦の秩序とは別に、この宇宙は、横に繋がりを持っていたのである。つまり、宇宙は多数の平面から成っており、それらは、対応という作用によって、互いに、結ばれていたのである。対応する平面とは、神、宇宙、国家、小宇宙〔人間〕等であった。十五世紀の Spain の神学者 Raymond de Sebonde は、次のように、天上の霊と地上の生物との対応を述べている。

If then there is maintained such an order among low and earthly things, the force of reason makes it necessary that among these most noble spirits there should be a marshalling unique, artistic, and beyond measure blessed. Further, beyond doubt, they are divided into three hierarchies or sacred principalities, in each of which there are the high middle and low. But this well-ordered multitude leads up to a single head: in precisely the same way as we see among the elements fire the first in dignity; among the fishes the dolphin; among the birds the eagle; among the beasts the lion; and among men the emperor.

[Abridgement of de Sebonde, Originally in Latin, translated into French by Jean Martin 1550. Quotation translated by E. M. W. Tillyard from book IV chap. 42 of French version.] 宇宙の秩序体系に関する、こうした、縦横の静的な考えと同様に、音楽に調和した舞踏という、言わば、動的な考えが存在していた。六世紀頃の人と云われている、Seville の百科全書学者の Isidore は Nothing exists without music; for the universe itself is said to have been framed by a kind of harmony of sounds, and the heaven itself revolves under the tones of thnt harmony. [E. M. W. Tillyard, The Elizabethan world Picture=Penguin Books, 1963, P. 123.] と述べております。このような、一見揮然とした体系を成てしいる秩序も、その反面、非常に崩壊易いものであるという考えが存在していた。外交官であり、数多くの古典翻訳家でもあった、十六世紀の英国人 Thomas Elyot は、その著 Governor の中で、そうした連鎖的崩壊現象を、次のように、説明している。Where there is any lack of order needs must be perpetual conflict. And in things subject to nature nothing of himself only may be nourished; but, when he hath destroyed that wherewith he doth participate by the order of his creation, he himself of necessity must then perish; whereof ensueth universal

dissolution. [Ibid., P. 21.] このように一つの要素が、その体系から逸れるという事は、自己の崩壊のみならず、他の崩壊をも、招く事になり、その結果として、秩序体系の全体が、混乱に陥るといふ事だったのである。

それでは、Shakespeare が、chain of being とか、 corresponding planes とか a dance to music といった個々の概念に通じていたといふ事を、それぞれの作品の言葉によって、立証しながら、中世の秩序観に照して、Richard II と Henry IV I部、II部、及び Henry V の作品全体を流れる悲劇性を考察してみたいと思う。と同時に、そうした悲劇性を描く事によって、Shakespeare が当時の社会生活にどのような働きを、示そうとしたかをも考えてみたい。

Richard II に於ては、王権の絶対性というものが強調されている。王はこの地上の秩序体系の頂点に位置し、天上の神と通じていた。であるから、そこに、どんな理由があつても王に背く事はあつてはならなかつた。たとえ、王が不法で暴君であつても、その政治に忍従する事が美德であつたといふのが、云い過ぎであれば、少くとも、内乱を企てるよりは、better であるという考えが、中世のそして Elizabeth 朝の政治理念だったのである。Gloucester 公夫人が、夫の殺害者として、Richard II を、弾劾した時のそれに対する Gaunt の言葉は、王の神聖視といつた。つまり、chain of being によって調和を保つ体系は、どのような事があつても、乱してはならないといふ中世的理念を示すものである。

Gods is the quarrel - for Gods substitute, / His deputy anointed in His sight, / Hath caused his death; the which if wrongfully, / Let heaven revenge, for I may never lift. / An angry arm against His minister. Richard II. I. 2. 37~41.
王自らも、王権は絶対的なものであり、自己を中心とした秩序の体系は、乱してはならぬものと心に決めていた。Bolingbroke 反乱の報に、急いで帰国した Richard II は王権の絶対性を主張している。

Not all the water in the rough rude sea / Can wash the balm off from an anointed King. / The breath of worldly men cannot depose / The deputy elected by the Lord = Richard II. III. 2. 54~57.

又、人間界の秩序体系の頂点に立つ王は、天体の長たる太陽と対応されている。

See, see King Richard doth himself appear, / As doth the blushing discontented sun / From out the fiery portal of the east, / When he perceives the envious clouds are bent / To dim his glory and to stain the track / of his bright passage to the occident. Richard II. III. 3. 62~7.

こうした、犯すべからざる秩序の体系も、移り気な民衆の手が、その反逆に加わる時、崩壊の運命に置かれるのである。

White-beards have armd their thin and hairless scalps / Against thy majesty: boys, with women's voices, / Strive to speak big and clap their female joints / In stiff unwieldy arms against thy crown, / The very beadsmen learn to bend their bows / of double-fatal yew against thy state; / Yea, distaff-women manage rusty bills, / Against thy seat Both young and old rebel, / And all goes worse than I have power to tell.

Richard II. III. 2. 112~3.

こうして、秩序の体系は、その頂点に位置したものが、崩れてしまった事によって、混沌状態に陥る。Bolingbroke が、王として、君臨した Henry IV 王治世の混乱は、この時、その種を蒔かれたのである。愚かな民衆も加わって、Boling broke は、この秩序体系を、Chaos の中に、陥れたのである。かくして、これより、連鎖的な崩壊をみる事になる。

正統な Richard 王に代って、王座に登らんとする Bolingbroke の罪業に対して、Carlisle の bishop は、その行為の非道を説き、将来の混乱を予言している。又 Pomfret 城へ送還を言い渡された Rickard II は、王位篡奪の共謀者 Northumberland に、やがて来る乱世を予言している。

Northumberland, thou ladder wherewithal / The mounting Bolingbroke ascends
my throne, / The time shall not be many hours of age / More than it is, ere foul
sin gathering head / Shall break into corruption.

Richard II. V. i. 55~9.

存在の鎖に、きちんと結ばれている体系に於て、下のものが上のものに、取って代ろうとする時、攀登するための梯子が必要とされる。Richard 王の予言通り、後年の Northumberland は、梯子の地位に甘んじようとしなかった。ここにも、また、Henry IV 治世の悲劇が存在していたのである。Pomfret 城で、死の予感に襲われた Richard 王は、現在の境遇を嘆きながら、瞑想に耽る。王は、小宇宙〔人間〕と国家とを対応させながら、心と国の乱れを、音楽的調和の乱れによって、表わしている。

Music do I hear? Music. Ha, ha! keep time; how sour sweet music is, / When time
is broke and no proportion kept! / So is it in the music of men's lives. / And here
have I the daintiness of ear / To check time broke in a disorderd string; / But for
the concord of my state and time / Had not an ear to hear my true time broke.
/ I wasted time, and now doth time waste me: / For now hath time made me his
numbering clck: / My thoughts are minutes; and with sighs they jar / Their
watches on unto mine eyes, the outward watch, / Whereto my finger, like a dials
point, / Is pointing still, in cleansing them from tears. / Now sir, the sound that
tells what hour it is, / Are clamorous groans, which strike upon my heart, /
Which is the bell: so sighs and tears and groans / Show minutes, times, and
hours: but my time / Runs posting on in Bolingbroke's proud joy, / While I stand
fooling here, his Jack o' the clock. / This music mads me; let it sound no more;
/ For though it have help madmen to their wits, / In me it seems it will make
wise men mad.

Richard II. V. 5. 41~63.

この狂気という言葉は、Richard 自身の心の狂気を表わしていると同時に、国の狂気、つまり、Chaos を表わしているのであろう。そして、音楽によって、狂気が正気に還るという状態は、正に、a dance to music の状態なのである。秩序の体系は、すでに、乱調子になっている。そして、Carlisle や、Richard の予言の言葉と共に、Richard 王の次の言葉は、そのまま、Henry IV への、呪となっている。

'That hand shall burn in never-quickning fire/That staggers thus my person.
Exton, thy fierce hand/Hath with the kings blood stain'd the kings own land.

Richard II. V. 5. 109~111

Carlisle や Richard 王の呪いの言葉は、Henry IV 治世の英国の空を、重く覆う。王冠を頭にするものが持つ筈の威厳も、かつての共謀者である Northumberland の一家に対しては、全く効をなさない。Northumberland の弟の Worcester は、王の非難に対して、曾て新王に尽した功績をかさに、横暴である。Richard 王に代った時、すでに、Henry IV 王は秩序の頂点に位置する資格を失っていたのである。Worcester は Henry IV の言葉に、全く、耳借そうとしていない。

Our house, my sovereign liege, little deserves/The scourge of greetness to be
used on it,/And that same greetness too which our own hands/Have help to
make so portly.

King Henry IV. Part. I. I. 3. 10~13.

彼ら一家の者は、王の待遇を不満として、謀叛を開始する。そして Northumberland の息子の Henry Hotspur は、王に対する反逆を、一家の者に挑撥している。

Is there not my father, my uncle, and myself? Lord Edmund Mortimer, my
lord of York, and Owen Glendower? Is there not besides the Douglas?

King Henry IV. part. I. II. 3. 24~7.

彼らの結びつきも、その反逆も、乱れた国の秩序を取り戻す為といった国家救済的なものではない。全てが混乱なのである。人間界の秩序が崩れると自然界も動揺し、天体にも異変が生ずる。

How bloodily the sun begins to peer/Above yon busky hill! the day looks pale
At his distemp' rature.

King Henry V. part I. V. 1. 1~3.

この、Henry IV の言葉は、chain of being のゆらぎ表わしている。空と国家とを対応させて、謀叛の Worcester 郷を次のように、非難している。

What say you to it? will you again unknit/This churlish knot of all-abhorred
war?/And move in that obedient orb again/Where you did give fair and
natural light,/And he no more an exalted meteor,/A prodigy of fear, and a
portent/Of broached mischief to the unborn times?

King Henry IV. part I. V. 1. 15~21.

王は、軌道を外れた星と反逆の Worcester を対応させている。更に、王は、国家と人とを対応させて、国の秩序の乱れを悲しんでいる。

Then you perceive the body of our kinglydom/How foul it is; what rank
diseases grow,/And with what danger, near the heart of it.

King Henry IV. part II. III. I. 38~40,

Carlisle や Richard の予言は、現実となって、王に迫っている。このような外面的秩序の乱ればかりでなく、Henry IV の心の内部の秩序体系も、崩壊を来たす。自分の行為を、是認出来ないものが、他を信じられる筈がない。Richard II に代った時、彼は、人を信じる心を失ってしまったのである。疑いは息子の Henry 王子にも、向けられる。病床にある時、枕元に置いた王冠がないのを、自分が死ぬのを待ちかねて、王子が持っていたと邪推してもらすところの彼の言葉は、私達の心を、痛ましく、打つのである。

Dost thou so hunger for mine empty chair / That thou wilt needs invest thee
with my honours / Before thy hour be ripe?

Henry IV, part II. IV. 5. 95~7.

王自らをして、自分の行為と心とに、顔を背けさせたものは、彼の心の中に消えずに残っていた所の罪の意識だったのである。そして、彼は、その意識から、生涯逃れる事が出来なかった。それは、人間が人間である限り、どんな暗闇に落ちて、依然として、心のうちに存在するものである。であるから、Falstaffらと遊とうに耽る Henry 王子の行為すら、過去の罪業に対して、下された神の鞭と考えられる。

I know not whether God will have it so / For some displeasing service I have
done, / That, in his secret doom, out of my blood / He'll breed revengement and
a scourge for me; / But thou dost in thy passages of life / Make me believe that
thou art only marked / For the hot vengeance and the rod of heaven, / To punish
my mistreadings.

King Henry IV, part I. III. 2. 4~11

相次ぐ内乱と心の苦しみのために、不眠症に陥った Henry IV は、眠りの神に次のように訴えている。

O sleep, O gentle sleep, / Natures soft nurse, how have I frightened thee, / That
thou no more wilt weigh my eyelids down / And steep my senses in forgetfulness?

King Henry IV. part II. III. 1. 5~8.

こうした Henry IV 王の心に、かつての Richard の言葉が甦ってくる。

When Richard, with his eye brinful of tears, / Then check'd and rated by
Northumberland, / Did speak these words, now proved a prophecy? / Northum-
berland, thou ladder by the which / My cousin Bolingbroke ascends my throne';
(Though then, god knows, I had no such intent / But that necessity so bow'd the
state / That I and greatness were compell'd to kiss) / 'The time shall come', thus
did he follow it, 'The time will come, that foul sin, gathering head, / Shall break
into corruption': so went on, / Foretelling this samc times' condition / And the
division of our amity.

king Henry IV. part II. III. 1. 67~79.

今更、王は、秩序体系を乱した事の恐ろしさを、知るのである。彼の一生は、政治にあっては、自分より、王位継承権を強く主張出来た Edmund mortimer を始め、かつての共謀者、

Northumbeland 一家の者の反逆に悩まされ、心の内にあっては、罪の意識に、責められるといった悲惨な一生であった。

Bolingbroke が、Richard 王に代って、王座に位置した事によって生じた連鎖的な崩壊は、息子の Henry V の時代にも、続いている。即位後、間もなくして、Scroop や Cambridge 伯らが、謀叛を企てている。そして、その後も、彼の一生は、仏との対外戦争に明暮れるといった、多難な生涯であったと云えよう。更に、彼は、罪の意識のために、Agincourt の戦いの前夜に、次のように、神に祈っている。

Not to-day, O Lord, / O, not to-day, think not upon the fault / My father made
in compassing the crown!

King Henry V. IV. 1. 309~11

戦いの後で仏王女 Katherine に求婚する彼の言葉にも、父の犯した罪の傷痕がみられる。

Now, beshrew my father's Ambition! he was thinking of civil wars when he got
me = therefore was I created with a stubborn outside, with an aspect of iron,
hat, when I come to woo ladies, I fright them.

King Henry V. V. 2. 241~45.

このように、国の政治においても、父子二代に至る王達の心の内部においても、連鎖的な崩壊は、悲劇の流れを成して、続いている。

ところで、詩の社会的、道徳的使命を重んずる Sidney の詩論が存在した時代、新聞やラジオもなく演劇というものの社会的使命が極めて大きかった時代に、Shakespeare が中世の秩序観を背景にして、こうした悲劇性を描く事によって、人々に、混乱の恐ろしさ、秩序の尊さを、教えようとした事は、異論のないところであろう。しかし、私は、Henry V の中に、もう一つの Shakespeare の態度、民衆に対する細やかな心遣いといったものを感じる。つまり、Shakespeare は、この四つの作品ばかりでなく、彼が描いた史劇の中の最後の作品である Henry V を、秩序の回復を以って、終る事によって、統一と平和とを求めずにはいられない民衆の気持ちに、ある満足を与えようとしたと思うのである。Shakespeare は、そうした意図の下に、Henry IV の中に、一つの伏線を引いている。

God knows, my son / By what by-paths and indirect crook'd ways / I met this
crown; and I myself know well / How troublesome it sat upon my head. / To thee
it shall descend with better quiet, / Better opinion, better confirmation; / For all
the soil of the achievement goes / With me into the earth.

King Henry IV. part II. IV. 5. 184~91

このように、Henry IV 王は、臨終にあって、息子に、呼び掛けている。こうして、Henry V は、王冠を、譲り受けたのである。もう、秩序の体系は、絶対に、乱す事があってはならない。Scroop ら一味の謀叛に対して、王は厳しい裁きを下している。

Touching our persoh seek we no revenge; / But we our kingdom's safety much so
tender, / Whose ruin you have sought, that to her laws / We do deliver you.
Get you therefore hence, / Poor miserable wretches, to your deaths:

King Henry V. II. 2. 174~77.

更に、Exter と canterbury の会話の中には、国家と kingship の理想が、集約されている。そして、その言葉の中に、Chain of being と corresponding planes と a dance to music に対する、Shakespeare の 関心を見る。Exter が、国家の hierarchic order を強調し、音楽のように上下が調和して、政治が行われるべきだと主張すれば、Canterbury も、蜜蜂の集団を、例にとって、各人が、各々の職務に対して、忠実でなければならないと説いている。

For government, though high and low and lower, / Put into parts, doth keep in one consent, / Congreeing in a full natural close, / Like music. Cant. Therefore doth heaven divide / The state of man in divers functionions; / Setting endcavour in continual motion / To which is fixed, as an aim or butt, / Obedience; for so work the honey-bees, / Creatures that by a rule in nature teach / The act of order to peopled kingdom.

King Henry V. 1. 2. 180~189.

これこそ、当時の人々が理想とした秩序の体系であり、政治的世界観であった。

さて、Henry V が、真の意味で、秩序体系の頂点に位置するには、つまり、Richard 王の位置に立つためには、神の同意が、必要であった。Henry V の王位を、神の意志によるものとする事によって、Shakespeare は、Henry V 治世の英国を、秩序の完全なる回復としている。それは、Shakespeare が、過去の歴史劇の中で追い求めて来た理想の姿だった。勝利の Agincourt の戦いの後で、王は、次のように、命令している。

K. Hen. Come, go we in procession to the village: / And be it death proclaimed through our host / To boast of this or take praise from God / Which is his only.

King Henry V. IV. 8. 118~21.

こうして、秩序は、甦えり、国の統一が成る。おそらく、当時の観客の心ある者は、この終幕をみて、ある満足の感を得たであろう。そして、自分達の周辺をみて、そこに希望を感じながら、席を立ったのではなかろうか。